

〈研究ノート〉

商標の称呼のモーラ数が増加したときの 類否判断に与える影響

— 語尾に「ス」「ズ」が付加して1モーラ増加した場合 —

須賀 総 夫

1. 「称呼類似」について

ある商標から導き出される「称呼」(appellation 端的には発音)が他の商標のそれと類似するか否か、が「称呼類似」の問題であって、出願した商標の称呼が先登録のものに類似すると登録を受けられないし、場合によっては商標権侵害の責任を問われるため、商標を使用する事業者にとって、重大な利害がある。称呼類似の判断は、二つの商標の称呼をそれぞれ決定したうえで、その間に「聴き紛れ」がないかどうかを検討する作業であるが、この検討は、時と所を別にして二つの商標に接した需用者がそれらを混同するか否か、という観点から行なうので、音声よりは音韻の、人の脳裏に残った観念的なものを対象とすることになり、そこに困難がある。

筆者は、登録の実務を行なっている特許庁の実務において、称呼類似がどのような基準で判断されているか、特許庁が出した「審決」を資料として調査している。これまでに、二つの称呼のモーラ数が異なることが、判断にどう影響するかをみた。

2. 称呼類似を決定する諸要因と、「ス」「ズ」の付加

称呼類似を決定する要因としては、二つの称呼のモーラ数の大小・異同、異なる音節を構成する音素の素性の違い、聞こえ度、アクセントなどが考えられている。ここでは、モーラ数と有声・無声の違いのうちで、とくに一方の称呼が他方の称呼の末尾に、ス[su]またはズ[zu]がついた形とつかない形との組み合わせを取上げる。「ス」および「ズ」は、複数の表現として商標に多く採用され、判断された事例数が多い。

調査は、平成元年～19年10月までに出了特許庁の審決類(拒絶査定不服審判の審決、登録異議申立に対する決定および登録無効審判の審決)を対象とした。

データは、(株)パテントジャパン社『商標類否叢集』第65号(2008)から得た。

3. 語尾への「ス」の付加

「ス」の付加によりモーラ数が増加するわけで、その影響は、当然にモーラ数の小さいうちは大きく、モーラ数が大きくなると急速に低下する。このようすを、非類似認定率(審査部で類似

と判断した結論が審判部で覆えされ、非類似とされた件数の割合)で見れば、下の表のようなになる(6→7 モーラ以上は事例が少ないので省略。実際の商標はラテン文字で構成されることが多いが、表には称呼だけをカタカナで記した)。

この率は、平成前半期よりも後半期のほうが高くなっている。つまり、近年では、「ス」が付加された称呼は、そうでないものから聴き分けられる、という判断が強くなっている。

「ス」の付加	2→3 モーラ	3→4 モーラ	4→5 モーラ	5→6 モーラ
具体例	ココ vs. ココス	マック vs. マックス	ユニック vs. ユニックス	エステック vs. エステックス
具体例についての類否判断	類似→非類似	類似→類似・非類似の両様あり	類似→類似・非類似の両様あり	類似→類似
非類似認定率%	86%	48%	38%	9%
非類似(全体)	39%			

類否判断が変更されるかどうかにかかわらず、「ス」が付加する語尾の音節がどのようなものであるかが、大きく影響していることがわかった。それを下の表に記す。

	促音+ク ～ック→～ックス	鼻音 ン→ンス ム→ムス	その他 X→Xス
具体例	クリック vs. クリックス アレック vs. アレックス*	ラリアン vs. ラリアンス クライム vs. クライムス	サンブラ vs. サンプラス ウイング vs. ウイングス
具体例についての類否判断	類似→類似 *類似→類似・非類似の両様	類似→非類似 類似→非類似	類似→非類似 類似→類似のまま
非類似認定率%	15%	71%	38%

4. 語尾への「ズ」の付加

「ズ」の付加によるモーラ数の増加が与える影響は、「ス」の付加について上にみたような傾向と同様であるが、モーラ数が小さいところで、もっと顕著といえる。

「ズ」の付加	2→3 モーラ	3→4 モーラ	4→5 モーラ	5→6 モーラ
具体例	トイ vs. トイズ	ウイン vs. ウインズ	パターン vs. パターンズ	サンホーム vs. サンホームズ
具体例についての類否判断	類似→非類似	類似→類似・非類似の両様あり	類似→類似	類似→類似
非類似認定率%	100%	36%	37%	17%
非類似(全体)	24%			

5. 結 論

- 1) モーラ数が小さいうちは、「ス」「ズ」の付加が引き起こすモーラ数増加の影響が大きく、非類似とされる率が高いが、その傾向はモーラ数が大きくなるにつれて急激に低くなる。
- 2) 「ス」が付加する語尾の音節が促音に続く「ク」である場合、非類似となる率が低いのは、「ス」が付加したとき「ク」の母音は無声化ないしは脱落して、いきなり破擦音 [ks] を形成し、この [ks] と [k] との相違があまり印象に残らないためと考えられる。
- 3) それに対し、鼻音 [m] [n] から摩擦音 [s] への移行は際だって聞こえ、「ス」の付加により類似から非類似へと結論が変わるようである。
- 4) 無声の「ス」に対して有声の「ズ」の付加は、影響がより大きくて類似の判断が覆る率が高いであろうと考えたが、この予測は外れ、非類似と判断される率はかえって低かった。今後の研究課題である。